
世界を越えし男と数の子たち

ココノエ・ヴァーミリオン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界を越えし男と数の子たち

【NNコード】

N8263Z

【作者名】

ココノH・ヴァーミリオン

【あらすじ】

俺はこの日、掛け替えの無い奴らに会った。

俺は車に跳ねられて死んだと思ったら、なんかよく分からんが別世界に行ってしまったみたいだ。

気が付けば、マッドな科学者や12人の姉妹と暮らしていくたり、組織にケンカ売って犯罪者になっちまつたり。平凡な日々を送つていたり

そして…俺は戦う。ナンバーズ達を、世界を守るために。

プロローグ（前書き）

ハハノエです。

初投稿なのでうまく出来てているか分かりませんが、頑張って面白いものを書いて行こうと思います。

プロローグ

夜の街を歩いている上下黒い服を着て赤いジャケットを着た男がいた。

秋の冷たい風が男に強く当たっている。

「??」「秋

とはいえ結構寒くなってきたな。」 独りそう呟きながら、上着のポケットに手を入れた。

男がポケットから取り出したのは、赤い、宝石のような石だった。

「??」「あれからもう半年か…」

赤い石を見て、彼は半年前の事を思い出していた。

半年前、彼・五十嵐優斗の家族は、居眠り運転による信号無視の車との衝突事故で亡くしてしまっているのだった。

彼の持っている赤い石は、彼の妹の沙耶に貰った物だった。

ユウト「そういやあ、明日はサヤの誕生日だったな。墓参りに行かないとい、父さんと母さんの分も何かお供え物でも持つて行ってやるかな。」 そう考えながら、青になつた信号を渡つた。信号の真ん中あたりで、同じ信号を渡つていた人達が自分の右側を見て何かを叫んでいる。

右側を見ると、大きいトラックが自分に向かつて突つ込んで来ているのを見て思わず優斗は叫んだ。

「コウトーちょー・マジかよオイ！」

トラックはもつすぐ目の前まで来ている。死ぬ、これは逃げようが無い。しかし、彼は不思議と落ち着いていた。

ユウト（ああ、もう死ぬからかな、時間がゆっくりに感じられる。サヤ、もうすぐ俺もそっちに行くみたいだ。お前の誕生日、そつちで祝つてやるよ。つて、プレゼント買ってねーから何もあげられないな、悪い。）

そうして彼は目を閉じた。

彼は気がついていなかつた。上着のポケットの中の赤い石が強烈な光を放つていた事を。そして、その光は彼を飲み込み、彼は姿を消した。

車は、何にも当たる事無く通り過ぎた。後に残つていたのは、車が当たる直前、光に飲まれて消えた優斗の事で困惑している人達だけだつた。

プロローグ（後書き）

光に飲まれた彼はどうなったのか。次回はナンバーズ達との出会い。
「コウト」異世界トリップとか、とんでもない事になつてゐるな、
俺。

出会いはいつも突然つて、いつもこれは特殊運営の（前書き）

今回、ナンバーズとマッチドな科学者と出会います。

出会いはいつも突然つていうけどこれは特殊過ぎる

「コウト」「あれ？生きてる…」優斗は呆然と突つ立っていた。自分は車に衝突したはず。それなのに体には何ひとつ怪我も無く、車に衝突したときに襲つてくる強烈な痛みも無い。

優斗が目を開けた先に映つたのは、五体満足の体と、どこかの建物の中であろうか、見知らぬ通路だった。

「コウト（どこだ？此処。天国つて訳じや無さそうだが）

優斗は上着のポケットに手を入れ、赤い石を取り出した。

「コウト（これが無事つて事は、車に轢かれてはいなつて事か。轢かれていたら、これも粉々になつているだろうからな）

それにも、何故自分は無事なのか、ここはいつたいどこのか疑問は死きる事はなかつた。

「コウト「ここに突つ立つていても仕方ない。とりあえず、この建物の外に出てみるか」

優斗は、見知らぬ通路を歩き始めた。

「コウト「そういえばこの建物、誰か人が居たりするのか？もし居たら俺、侵入者だとが言われたりするんかな？」

〔冗談半分でそう呟いた。その時、警報のよつた激しい音が突然鳴りだした。

「コウト「な、なんだあ！？」

警報の音に驚く優斗。

「コウト「これ…俺のせいか？だとするととまづいよな…」

「そう言つと優斗は走り出した。この警報の原因が自分なら、捕まつた後、警察にでも突き出されて逮捕、という事になるかもしねない。

持つていた疑問を後回しにして、優斗は通路を駆け抜けた。

「コウト、つたく、出口は何処だよ」

独りそう言つと、優斗は通路の壁に寄りかかつた。すると、左腕が何かにいきなり掴まれた感じがした。

左腕の方を見るとそこには、信じられない事が起きていた。なんと、壁の中から一人の女の子が現れたのだ。

「？？？」「つかま～えた」

可愛らしい声と共に、優斗の体を拘束した。

普段なら女の子と密着すれば、男としては少しばかり興奮したり恥ずかしいと思つたりするだろうが、今の優斗にはそれどころではなかつた。

「？？？」「セイン！侵入者は捕まえたか！」

走つて来た通路の奥の方から別の女の子……ではなく女性がやつて來た。

セイン「うん、捕まえたよトーレ姉

セインといふ名の女の子が、通路から來た女性トーレにそう答えた。

そして、トーレは優斗の所に来て、質問して來た。

トーレ「貴様……何者だ？管理局の魔導師か？」

コウト「何者だあ？相手が何者か尋ねるときはまず自分からじやねーのか？それに、管理局とか魔導師つて何だよ？」

それもそうか、と言うようにトーレは名乗つた。

トーレ「私はN.O.3、トーレだ。お前の名は何だ？何故、ここに侵入した？（管理局を知らない？この男はいつたいやつ……）

コウト「ああ、俺の名は優斗、五十嵐優斗だ。ここには、気が付いたらいたつて感じだな。つーか、ここ何処だよ。」

あのやり取りの後、俺はトーレとセインにとある一室に案内……と言つか連れて行かれた。トーレに「持つているものを全て渡せ」と言わされたので、持つているもの……携帯と財布、あと赤い石を渡し

た。赤い石を見たトーレが何か呟いたようだがよく聞こえなかつた。

トーレが部屋から出て行つた後、今の状況を整理していると、扉の開く音と共に、一人の人が入つて來た。

片方は紫色の髪に白い白衣を着た男、もう一人は薄い紫っぽい色の髪をした女性だ。

？？？「すまない、待たせてしまつたね。私の名はジエイル・スカリエッティ、隣に居るのはウーノ、私の秘書だ」

ウーノ「はじめまして、ウーノです」

コウト「あ、五十嵐優斗です。」

挨拶を交わした後スカリエッティは、赤い石を取り出して言つた。

スカリエッティ「君の持ち物を調べさせてもらつたよ」

コウト「それは、さつきトーレに渡した石」

スカリエッティ「これは、時空移動型のロストロギアのようだ。」

時空移動は映画とかで有つたから何となく分かるが、ロストロギアっていうのは知らないな。

コウト「なあ、その…ロストロギアっていうのはどういう物なんだ？時空移動つてのは何となく分かるけど」

スカリエッティからロストロギアについて聞いた。何でも、世界は一つだけでなく、星の数程あるらしい。そしてロストロギアとは、進化し過ぎた世界の危険な技術の遺産なんだとか。しかも、物については世界を滅ぼす程の力を持った物や、俺の持つていたような時空移動型の物もあるんだとか。

コウト（何でそんなものが俺の居た世界にあつたんだ？）

スカリエッティ「さて、これらの事から君は次元漂流者……世界規模の迷子になつてしまつた訳だが……」

コウト「ま、迷子……、つて、まだ何があるのか？」

スカリエツティが優斗の目を見ながら語る。

スカリエツティ「ああ、このロストロギアの魔力が切れていたからね、魔力を注入してみたが、全く反応しなかった」

ユウト「つまり、もうそれは使えない…そう言う事か？」

優斗は嫌な予感を覚えつつ、尋ねてみた。

スカリエツティ「そうだ。この石での時空移動は出来ない。仮に出

来たとしても、元いた世界に帰れる可能性はゼロに等しい

……ここまで言われたら誰でも分かる。

スカリエツティ「君はもう、元の世界には帰れないという事だ」

出金いはいつも突然つていうけどこれは特殊過ぎる（後書き）

さて、これから優斗はどうなるのか！？ 次回、スカリエッティが
優斗に言った提案とは？ そして、まだ見ぬナンバーズとの邂逅。ユ
ウト「改めて見ると、ナンバーズ達のあの格好：なんつうか…エロ
くねえ？」

何処の世界も組織の裏は真っ黒（前書き）

何か、半分位が説明になつてしまつた気がする。

何処の世界も組織の裏は真っ黒

帰れない。

それが意味する事は、一度と元の世界に帰る事は出来ない。スカリエッティの言葉を聞いた優斗の反応は……

凄く軽かつた。

ユウト「あー…まあ、いつか。」

優斗の余りにも軽い発言に、スカリエッティは思わずずつこけた。

スカリエッティ「ず、随分と軽くないかい？元の世界に帰れないと言つのに」

ユウト「ああ、どうせ帰れても家族もいなければ友人もいないし、元の世界に未練は無い。それに、ここに来る直前、車に跳ねられて死ぬ寸前だつたんだ。多分、俺は車に跳ねられて死んだ事になつてゐるんじゃないか？」

優斗のその言葉を聞いたスカリエッティは少し考えた後、何を思いついたのか、ニヤリと笑みを浮かべて優斗に言つた。

スカリエッティ「それならば優斗君……此処に住まないかい？」

優斗はスカリエッティのこの提案に思わず「……は？」と言わんばかりの表情になつてしまつた。

スカリエッティの言つた提案には、隣にいたウーノ達も驚いていた。

スカリエッティ「君は元の世界に帰れない以上、この世界で暮らすしかない。しかし、今の君には頼れる人もいなければ先立つ物もない。管理局の所に行けば、次元漂流者という事で保護して貰えるけ

ど、これはオススメ出来ないね

－管理局ー、トーレも言つていた、貴様は管理局の魔導師か、と。ここに優斗は、先ほどから持つていた疑問を口にした。

コウト「そういうやあ、さつきもトーレが言つてたけど、その…管理局つてのは何なんだ？何かの組織か？」

スカリエッティ「ああ、管理局というのは……」

優斗はスカリエッティから管理局の事を聞いた。

管理局とは、時空管理局の事で、そこでは魔導師という魔法を使う者達が働いている。魔導師は、体の中にある「リンカーコア」という器官から生じる魔力を用いて魔法を使つ。「リンカーコア」がなければ、魔法を使う事は出来ないとのこと。

そして、管理局についてだが……表向きは、魔法というクリーンな力を用いて、次元世界の平和を守る正義の組織。

しかしその裏……眞実は、リンカーコアを持つ人は少ないため、管理局は万年人材不足である。そこで、魔導師の人数不足を補うために管理局が行つていることが、…人造魔導師の製造だつた。スカリエッティに、映像で管理局の裏を見せてもらつたが…映像の中身は『地獄』といえるものだつた。

そこには、

生態実験により、原型を留めていない『何か』、

泣き叫ぶ子供や女性、男性、動物達。

気にもせずに実験を繰り返す研究員達。

コウト「な…何なんだよ！…これは…！」

余りの残酷さに、声を荒げる優斗。

スカリエッティ「…これが、管理局の実態だ」

そう言つと、スカリエッティは優斗の方を見た。すると、優斗の体が震えている。そして、優斗は叫んだ。

ユウト「ぞけんじやねえよ！…何が正義だ！何が魔法だ！、」

優斗の心からの怒りと叫びに、優斗の後ろにいたトーレも思わず後ずさりしてしまった。

ユウト「何が世界を『管理』するだ！自分の世界すらまともに『管理』出来てねえ癖に！それに…人の命を何だと思つてんだよ…」

少しして、落ち着いた優斗は

ユウト「スカリエッティ、此処に住ませてくれ。そして、アンタ達の計画に協力する。でも、唯の協力じやねえ」

ユウト「管理局は…ぶつ瀆す」

その言葉を聞いたスカリエッティは、

スカリエッティ「分かつた。歓迎するよ、優斗君」

あの後、俺はセインに部屋に案内された。その途中で改めて自己紹介した。

「…6つて言つてたけど、20・つて何？
そのうち聞けばいいか。

暫く案内された部屋で『ロロロロ』してたらスカリエッティが来て、夕食という事で食堂に案内された。そこで他のナンバーズ達に紹介するんだと。道中で聞いたらZ.O.ってのは、ウーノ達ナンバーズの製造番号の事で、スカリエッティの作品であり娘、そして『戦闘機人』だと言っていた。

あれこれ話しているうちに食堂に着いたので、中に入った。

食堂には自分とスカリエッティを除いた他のメンバーが全員揃っていた。

最初は驚きやら何やらで余裕が無かつたが、落ち着いて周りを見る
と、…なんつか…あの全身タイツみたいなスース姿…エロくねえ
?田のやり場に困るんだけど。見てる方が恥ずかしいんだけど…?

そんな事を思いつつ、俺は食堂に居るメンバーと会話を紹介した。

「五十嵐優斗だ。今日から此処に住む事になった。よろしく
な」
そう言つと、向こうも会話を紹介した。

濃いピンク色の髪を後ろでまとめている女の子が、ウエンティ。

赤髪の女の子が、ノーヴェ

茶色のロングヘアを、黄色いリボンで後ろで縛っている女の子が、
ディエチ。

栗色の髪を両脇で結び、眼鏡をかけてる女性が、クアットロ。
そして……

チング「チングだ、よろしくな」
チングと名乗つた少女は、銀髪は腰の下まで伸びて、右目を黒の眼
帯で隠した十代前半の少女だった。

……俺はその姿を見たとき驚いたよ。

チングと死んだ妹の沙耶が、

……あんなにも、似ていた事に……

何処の世界も組織の裏は真っ黒（後書き）

スカリエッティ達と暮らす事になつた優斗。しかし、問題が発生した。その問題とは？
コウト「見せてやるよ…、俺の料理の腕前を！」

お金があるが、つい余計な物まで買つてしまつたつある（前書き）

チンクとクリッタロの口調、これで合つてたつけ？

お金があると、つい余計な物まで買ってしまうたりする

俺達はお互に自己紹介（他にもZ.O.・2のドーカーHがいるが、今は任務中でいないとの事）した後、みんなで夕食を食べる事になった。

しかし……

ユウト「おー……、何だ、これ？」

スカリエッティ「何……って、夕食だが？」

夕食といえば、本来は手間暇かけて作った温かいおかずが沢山並んでいるだろう。

ところが、此処に並んでいたのは……

ユウト「俺の目がおかしくなれば、クッキーとかサブリメントにしか見えないんだけど」

スカリエッティ「君の目は正常だよ」

そり、此処に並んでいたのは、優斗の居た地球では、バランス栄養食品と呼ばれていた物だった。

ユウト「なあ、ウーンディ、またかとは思ひやしないよ……、今まで『これ』だったとか……言わねえよな？」

ウハウニティ「ん? 今までずっと『レバ』だったつスよ?」

その言葉を聞いた優斗は、部屋の隅に置いてある冷蔵庫に向かった。ノーヴェが「いらねえなら貰つちまつれ」と言っていたが、優斗の頭の中はそれどころではなかった。

冷蔵庫のドアを開け、中身を見た優斗は絶句した。

冷蔵庫の中身は、

バランス栄養食品でギッシリ詰まつていた。

優斗はドアを閉め、机に向かつた。そして……

「ウト「テメハらー! 馬鹿か! !」

優斗の叫びに、全員の動きが止まつた。

「ノーヴェ「な…何だよ…いきなり! !?」

「ウト「何だ! ジャねえよ! ! あの栄養食品の数! 何だ! 每日あんなもん食つてられるか! !」

「アットロ「あら~、好き嫌いは駄目よ、優ちゃん」

「ウト「好き嫌いとか以前に体壊すわ! つか何だ! 優ちゃんってのは! ?」

「アットロ「優斗だから『優ちゃん』よ」

「ウト「…それより、何で食材の一つや二つ無いんだ」

「スカリエッティ「そ、それは…誰も料理が出来ないから…」

その言葉を聞いた優斗は決心した。

ユウト「分かった。スカリエッティ、明日食材を買いに行つてくるから金をくれないか」

スカリエッティ「あ、ああ、構わないよ。でも君はこの世界をよく知らないだろう? 案内役に私の娘を一人連れて行きなさい」

チング「なら、私が行こう」

スカリエッティ「それならチング、頼んだよ」

チングは、「分かりました、ドクター」と言つた後、此方の方を向いた。

チング「やつ言ひわけで、明日は私が案内しそう」

ユウト「あ…ああ、それじゃあ、頼むわ。(やつぱりよく似てるんだよなあ…)」

——翌日——

俺は朝飯を我慢して『あの』栄養食品で済ませた後、スカリエッティの所に向かつた。

スカリエッティ「やあ、おはよつ、優斗君」

ユウト「ああ、おはようさん。さつそくだが、食材、買いに行つて

くるから金をくれ」

そつ言つと、スカリエッティは優斗に大量のお札を渡した。

スカリエッティ「それだけあれば足りるだろ？ チンクはもう準備して待つてるよ」

ユウト「分かった。じゃあ行つてくる」

アジトの入り口で待つていたチングと合流し、街に向かつた。ちなみに、チングは昨日の全身タイツ姿では無く、白いシャツにGパンを穿いていた。聞くと、街への偵察用にみんな普通の服は持つているとの事。

——首都、クラナガン——

ユウト「しつかしなあー、こいつのを見ると、改めて此処は地球じゃねえんだなって思うな」

優斗が周りを見渡すと、空間に浮かぶモニターを見たことの無い文字が目にはいる。

チング「？、地球はどんな所何だ？」

ユウト「地球も科学は発展してるけど、此処までじゃないな。それに、文字が違う」

チング「そうか。ちなみに、あれは魔法だぞ」

チングが空間に浮かぶモニターを指差して言つ。

ユウト「は？ あれが？、どう見ても科学じゃねえか。まさか、あの

超科学がこの世界の魔法つてか?」

魔法つてのはもつと、ファンタジーなもんかと思つてたのに。
ユウトがそう呟いているうちに、一人は大型スーパーに到着した。

食材を買い物籠に入れながら歩いていると、チングクが話しかけてきた。

チングク「そ、うい、え、ば、優斗、お前は料理出来るのか?」

ユウト「ん? ああ、これでも料理は得意たぜ。何か食べたいのがあつたら作つてやるけど?」

チングクは少し困つたように言つた。

チングク「うむ……料理を食べたことが無いからな……」

自分は何が食べたいよく分からぬ。ふと、商品のある棚を見た、そこで目に映つたのは、

プリンだつた。

チングク「なあ、プリンは作れるか?」

チングクはプリンの方を見ながら言つた。

ユウト「プリン? いいぜ。すると……卵と牛乳がいるな……」
そう言い、牛乳と卵を籠に入れた。

チングクはこの様子を見て、何気なく優斗に聞いた。

チングク「優斗はこの世界に来る前は、よく家族に料理を作つていたのか?」

優斗はチングの何気ない質問に一瞬表情を変えた。

ユウト「そうだな。母さんが料理出来なかつたから、よく俺が料理を作つてたな。父さんは仕事で家に帰るのが遅かつたし、妹のサヤは、病弱だつたから、俺が作るしか無かつたんだけど」

チング「そつだつたのか。しかし、優斗がいきなり居なくなつて、家族は心配してゐるのではないか?」

ユウト「家族は…半年前に死んだよ。事故にあつてな…」

チングは優斗に悪い事聞いたと思い、すぐに謝つた。

チング「…、済まない、悪い事を聞いた」

ユウト「気にすんな。さて、会計して帰るぞ」

チング「あ…ああ」

―――帰り道―――

道を歩いていの途中、チングが優斗に謝るようになつた。

チング「優斗、さつあは、悪い事を聞いて済まなかつた」
これに対しても優斗は

ユウト「さつとも言つたろ?気にするなつて」

その言葉を聞いたチング、それでも済まなさうに優斗の顔を見た。
その顔は、

とても悲しげだった。

チングク「優斗…お前は気にするな、と言つていたが、家族の事を話しているとき、悲しそうな顔をしていたんだ。

…特に、妹の事を話していた時は」

チングクが言つた後、優斗はチングクを見据えて言つた。

「ユウト「実はな…、最初、お前を見た時、妹…サヤを思い出したんだよ」

チングク「妹を…？」

チングクは少し驚いた表情になつた。

「ユウト「ああ、なんつうか…、よく似てるんだよ…。特に、雰囲気とかがな…」

チングク「わづか…」

「ユウト「やうだな…。帰つたら、俺の家族の事、俺の事を聞かせてやるよ」

チングク「…?、優斗の事を…」

「ユウト「ああ、そんじやあ、アジトに帰るや」

そして、二人は道を再び歩き出した。

お金があると、つい余計な物まで買ってしまうたりする（後書き）

アジトに戻った優斗とチンク、優斗の過去とは一体？

コウト「そういえば俺、今回料理するとか言って結局してねえや」

…次回、優斗が料理の腕前を発揮します。

学校で教師が「いじめはよくな」とか言つてるけど実際はいじめの現場を見た

この話を書いてたら、原作のナンバーズ達も一つの家族みたいな感じだよな、と思った。

つか、話が凄い事になつてるかもしれない。

学校で教師が「いじめはよくな」とか言つてゐるかと實際はいじめの現場を見た

アジトに帰つた俺達は、さっそく昼食の準備を始めた。

帰つた時には十一時くらいになつていて。とりあえず俺は、米を炊いた後、野菜炒めや卵焼きを作る事にした。作つてゐる最中に、セイントとウーンティがやって来て

セイント「へえ～、優斗つて料理出来たんだ？」

ウーンティ「美味しそうシスね、何を作つてるんスか？」

と、言つてたので、暇なう食器を出してくれ、と言つておいた。

一時間後、米も炊けたので、昼食を食べる事にした。ウーノとスカラーニティも栄養食品以外の食事は初めてとの事で、食堂に集まつていた。普段は研究室で食事しているとウーノが言つていた。

ユウト「うーし、出来たぜ」

「ディエチ「これ…優斗が作ったの？」

ノーヴェ「何だ、美味そつじやねえか」
みんな席に着き、手前に置かれてる箸を見る。

トーレ「これは何だ？」

ユウト「箸だ」

クラットロ「どうやつて使うのかしら？」

ユウト「それはだな……」

優斗が、箸の使い方をナンバーズに教える。

数分の箸講座を終えて、ナンバーズの皆は箸が使えるようになつた。

ノーヴェ「よーし。じゃあ早速

「

ユウト「ハイ、ストップ！ ちょっと待つた！」

ノーヴェ「何だよ！？」

優斗がノーヴェを制す。

ユウト「食事を始める前に、『『いただきます』は？』

ノーヴェ「何だよ、ソレ？」

ユウト「まあ、食材になつてくれた命に対する感謝の気持ちみたいなもんだ」

ディエチ「そうなの？」

ユウト「さうなの。ちなみに食べ終わった時は『『ありがとうございました』だ

そつぱうと、トーレはなるほど」と言つて

トーレ「それなら、我々も優斗の言つ通りにするか

ユウト「それじゃあ……」

全員『『いただきます』

俺の作った料理はとても好評だった。

「一かノーヴェ、オメードんだけ食うんだよ。」飯何杯おかわりした? 軽く五杯以上食つてたよな?

そして、後片付けの最中

ユウト「それじゃあチング、後で俺の部屋に来てくれ、そこで話すから」

チング「? …、ああ、分かった。…しかし、いいのか? 家族の事、話すのが辛かつたら、話さなくても良いんだぞ」

その時、横から声が掛かつた

セイン「?、ねえねえ、何の話?」

ディエチ「優斗の家族がどういひつて聞こえたけど…」

ウェンデイ「あ、あたしも聞きたいっス」

スカリエッティ「そういえば…君は昨日、家族がいないと言つていたね」

まだ食堂に残つていた四人が一人の話を聞いていた。

チング「優斗……」

優斗は四人の方を向いた。

ユウト「… そうだな。いいぜ、俺の家族の事、お前たちにも聞かせてやるよ」

そつ言うと六人は机の椅子に座つた。

ユウト「それじゃあ話すとするか、俺の事、俺の家族の事を……」

俺の家は元々三人家族だった。

母さんは専業主婦で、父さんは普通の会社勤めのサラリーマンだった。

俺の家は別段金持ちでも貧乏でも無かった。

そして、俺が3歳の時、妹のサヤが生まれた。

サヤは生まれつき体が弱かつた。髪は白くて目は赤い…色素欠乏症…アルビノだつたせいかは分からねえけど。

まあ、それでもあの頃は家族四人、とても幸せだった。

俺が九歳になつた時、サヤは六歳で小学校に入学した。

俺はその頃は友人もいたし、結構楽しかつた。でも、それも余り長くは続かなかつた。

サヤはアルビノで、周りと髪や目の色が違った。

そのせいか、サヤはクラスで孤立していた。一人だけ、周りと違うから気味悪く思われて居たんだろう。

サヤはよく苛められていた、 気持ち悪い 近寄るな 等と言われたり、石を投げつけられたりされていた。助ける度に、本人は大丈夫と言っていたが、とてもそうは思えなかつた。

それからある日、事件が起こった。

サヤを苛めていた集団の一人が投げた石が

サヤの右目に強く当たった

俺はその瞬間を見た

サヤの右目から

赤い血が出たのを

俺は怒りがこみ上げ、サヤを苛めていた集団を半殺しにした。

俺はサヤを背負つて近くの病院に行つた。

病院で検査の結果、医者に言われた事は

サヤの右目は治らない

俺はその言葉を聞いて、とても悔しかった。医者にハツ当たりもした。

数日後、サヤは病院から退院した。

右目に眼帯を付けて

俺は学校で孤立した。人を半殺しにしたことで、俺は恐れられた。仲の良かつた友人も離れていった。

サヤはあの事があつた後も学校に通っていた。

サヤはより苛められるようになつた。

白い髪に赤い目、それに眼帯。

その姿を見た周りの人は、サヤにこんな事を言つた

――『化け物』――

と

そう言われた日の夜、サヤは俺に泣きついてきた

その日、俺は決めた。サヤを苛める奴を、サヤを泣かせる奴は絶対に許さないと。

その日から、学校で俺も苛められるようになった。

『化け物の兄』

として……

俺はそう言つた奴らを、男も女も関係なく、半殺しにした。

「サヤを悪く言う奴らは許さねえ」と

そつ言つ俺の姿を見て、誰かがこつひつ言つた。

――『死神』――

サヤは学校に行かなくなつた。俺は中学へ進学した。

中学でも孤立し、恐れられていた。俺の事を何処からか聞きつけた奴らが、サヤの事で悪く言つてきたりした。それでよくケンカになつた。

俺は中学を卒業して高校に入った。

成績は良かつたから、入るのは余り問題じや無かつた。

中学の他の奴らは誰もいなかつた。

中学校や小学校のときみたいに友人は居ない…と言つか作つていない。

高校生活は平和だつた。

俺やサヤの事を悪く言つてくる奴らが居なかつたからな。

俺の誕生日には、サヤか近くにある河原で拾つたと言つて、赤い…
宝石のような石をくれた。

だが……数日後、

両親とサヤが死んだ。

原因は居眠り運転をしていた車に跳ねられたこと。

俺は家に居たから無事だつたが、サヤは、両親は、この世から居なくなつた。

それから半年後、俺は街中で車に跳ねられて死んだ。そう思つたらこのアジトにいた。そして

お前たちに出会つた

ユウト「——とまあ、これが俺の家族とか、過去のことだ」

そう言い、優斗は話終えた。周りを見ると、何人か泣いていた。

ウェンディ「サヤが…サヤがかわいそつっス…」

ディエチ「うん…」

セイン「優斗…大変だつたんだな…」

ユウト「……そーだな……、俺は最初、チンクを見たとき、チンクとサヤが被つて見えた。似ていたからな……」

そう言い、優斗は時計を見た。

優斗「……と、そろそろ夕食の準備をしないとな」黙つていたスカリエッティは口の開いて、優斗に聞いた

今まで

スカリエッティ「君は…寂しく無いのかい？」

ユウト「寂しく無い…って言えば嘘になるな…」

優斗は続けて言つ。
ユウト「さつき、みんなで昼飯食つてた時も、家族が生きてた時を思い出した。」

五人は無言で聞いている。

ユウト「家族と一緒に食つてた飯は美味かつた。ああ、さつき食つた飯も美味かつたぞ。…って、自分で作つたんだけどな。でも、何かが違うんだよ…。」

多分、一緒に住んでいるとは言え、家族じゃ無いからかな」

優斗の言葉を聞いて、スカリエッティは椅子から立ち上がつた。

スカリエッティ「優斗君。私は君のことを家族同然だと思ってるよ

ユウト「え…!？」

スカリエッティに続けてセイン達が言つ。

セイン「あたしも優斗の事、家族だと思つてるよ」

ウェンディ「そつつスよ。一緒に飯食べたりしたんスから」

ディエチ「優斗は違うの?」

四人の言つた事に優斗は

ユウト「いや…、そ、うか、そ、うだつたな。此處に住むになつた時か
ら、俺は、俺達はもう

——『家族』なんだよな——

スカリエッティ「じゃあ、改めて言おう。——よつこそ、歓迎する
よ、優斗君」

ユウト「——ああ」

こうして、俺は改めてスカリエッティやナンバーズの一員になつた。

そして夕食を食べた後、チングクが俺に話しかけてきた。

チングク「優斗、家族と食べた料理はどうだ?」

ユウト「どうつて…、俺が作ったなんだけどな……

——美味かつたぜ、さつきよりも

チングク「…そ、うか、な、あ、また今度、プリン、作ってくれないか?」。

お前の作ったプリン、美味かつたからな……

ユウト「了解」

ユウト「チンク」

チンク「何だ?」

ユウト「家族つて……いいよな……」

チンク「そうだな……」

学校で教師が「いじめはよくな」とか言つてゐるけど実際はいじめの現場を見た

さて、次回からは今までどうつて変わって平凡な日常になります。

次回、探検、発見、ミッドチルダの都市クラナガン。

コウト「これは…良いものだ…」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8263z/>

世界を越えし男と数の子たち

2011年12月28日20時51分発行